るの暴挙に出たのであった。・・・・・

次に、昭和二十年に発行された雑誌を順次揚げる。

短歌

「アララギ」　九、十、十一、十二月号。

九月号「編集所便、土屋文明記」（休刊中の報告）より。・・・四月十四日の空襲で印刷所が全焼し、印刷の出来上がっていた一月号は焼失してしまった。遅刊を取り返すつもりで二、三月合併号を編輯し、印刷所に寄託してあったが、その原稿はごく一部分を除く外、同日焼失してしまった。・・・四、五月、及び六、七月合併号の原稿を携行し、五月二十七日に豊橋へ出発するため編輯を急いで居った、その二十五日に発行所は焼失した。

「心の花」　一、二十三＋四月合併号、五十六＋七月合併号。

「石榑正君を悼む　佐佐木信綱記」・・・追悼歌（我妹わ子ら手とり助けて燃えさかるほむらが中を進みけむあはれ）

「石榑正君を憶ふ　角鴎東記」・・・三月十日の戦災に一家全滅ともいふべき不幸に合はれようとは、全く思いも設けぬことであった。同君が最後に手掛けられた「心の花」の二月号および三月号が、それぞれ発送直前および製本済にも拘わらず、五月二十五日夜罹災して、遂に世に出でずして了つたことは、同君の霊も定めて遺憾としてゐられることであらうと想ふ。

「多摩」　十、歳末号。

「短歌研究」　一、二、三、四、九、十、十一、十二月号。

三月号に、折口春洋、釈迢空作、長歌一首と文章「砲眼消息」。四月号に、片山広子の短歌四首「疎開の家」、五首「・・・大森の家強制疎開となりぬ・・・」。九月号に、柳原燁子の短歌十首「休戦四日前吾子香織戦死す」。

「日本短歌」　十月号。

九月号は、連合軍最高司令部より発禁を指令された。

俳句

「雲母」　飯田蛇笏主宰。一＋二月合併号、三月号。

「俳句研究」　目黒書店。　二、三月号。

「ホトトギス」　三、四、十一、十二月号。十二月号巻末に「俳句の訳」が再開、高濱虚子の一句（鴨の中の一つの鴨を見てゐたり）の英語による注釈。

国文学

「国語・国文」　九＋十月合併号。京都帝国大学国文学会、代表者沢瀉久孝。

「国語と国文学」　一、八、九＋十二月合併号。東京帝国大学国語国文学会、代表者藤村作。

文芸誌

「新潮」　二、十一月号。

「新青年」　一、二、十、十一＋十二月合併号。

「文藝春秋」　一、二、三、十、十一、十二月号。

二月号に斎藤茂吉の短歌五首「特別攻撃隊」（大元帥統べたまふ軍のいきほいの最中かがやくこのいつかしさ）他。同号に高濱虚子の俳句七句「小諸雑詠」（迷ひ居る雲や浅間は雪ならん）（蕎麦干してゐて時雨るるを知らぬげに）他。

「早稲田文学」　一、十二月号。

「文学」　十、十一、十二月号。

「文芸」　四、九＋十月合併号、十一、十二月号。